

新潮文庫

今昔百鬼拾遺 天狗

京極夏彦著



新潮社版

III34

今昔百鬼拾遺

天狗



◎天狗

◎天狗

——畫圖百鬼夜行／陰 鳥山石燕／安永五年

(前略) 山に對する信仰・神祕觀の一現象には違いないが、山だけに住んだ實在の特殊な人間を、里の人が誤認した經驗も天狗譚には含まれているかと思われる。山中で大木を伐り倒す怪音(天狗倒シ)・天狗笑ヒ・天狗ツブテなどの幻覺の例は今も各地に信じられている。天狗が子供をさらい、神隱しにする話は中世以前の驚、その後の鬼につづいて近世甚だ廣く語られるようになった。

——民俗學辭典 柳田國男監修／昭和二十六年

1

「高慢だと思いいになったでしょう」

いいのですその通りですからとお嬢様は云った。

お嬢様である。

どう観てもお嬢様だと、呉くれみ美由紀ゆきは思う。

美由紀は漁師の孫である。父は漁師を辞めて小さな水産会社を経営しているが、業態が株式会社になったと云うこと、父本人が漁に出なくなると云うこと以外、別段違いは感じない。漁師時代と生活が変わったと云う実感はない。だから自分は社長の娘ではなく、元漁師の子で漁師の孫だと美由紀は思っている。

漁師になりたいとは思わないけれど、性質として美由紀は漁師属性を持っていると思う。社長令嬢なんかではない。

それなのに、両親はかなり背伸びをして、美由紀を全寮制のお嬢様学校に入学させたのだった。

でも結局美由紀は変わらなかつた。

その学院は、刑事事件に巻き込まれ、人死にまで出し、醜聞しゅうぶんと汚濁おたくに塗まみれて閉校したのであつた。

美由紀が変わる前に。

これで窮きゆうくつ屈くつな暮らしとは縁が切れるかと清清せいせいしたのだったが、世の中と云うのは儘ままならないもので、親切なお金持ちのお節介のお蔭で美由紀はまたもや全寮制の女学校に転入することになってしまったのだった。

漁師の孫が良かったのに。

だから、相も変わらなず美由紀の身の周りには女学生女学生した女学生達が掃はいて捨てる程にいて、それぞれが幼い自尊心やら叶う筈のない夢やら美しい毎日やらを身に纏まとつて、馴なれ合つたり競い合つたり助け合つたり唾いがみ合つたりしている訳であり、彼女達は各々おのおのがそれなりのお嬢様ではあるのだからうけれど、それでも目の前にいるこのお嬢様に較べればまるでお嬢様たり得ていないように思う。

彼女達がお嬢様のなり損ないにしか見えなくなつて来る。

そんな風に云うと学友達に失礼な気もするが——彼女達もまあお嬢様ではあるのだからうけれど、何と云うか、その、お嬢様としての年季が違うのである。

このお嬢様は、筋金入りだ。

代議士の一人娘で、乗馬薙刀、お茶にお華を習得しており、趣味はオペラ鑑賞に洋

菓子作り、三箇国語を自在に操ると云う国際派の才媛、お嬢様とは斯あるべしと云わんばかりの、ズバリ深窓の令嬢なのだった。

名を篠村美弥子と云う。

年齢は二十歳だそうだが、もつと若く見える。何をしても自信たっぷりに見えるし、それでいて潑刺はつらつとしている。その所為せいかもしれない。

見た目——と云うか、顔立ちも髪形も身に着けているものも、何もかも、お嬢様以外の何ものでもない。立ち居振る舞い物腰口調、何処を取っても、もう完全無欠のお嬢様なので、美由紀もお嬢様と呼びそうになつた程である。

ただ、このお嬢様はお嬢様ではあるのだが、ただのお嬢様ではないようだった。

その証拠がこの危機的現状である。

美由紀と篠村美弥子は——。

軽く遭難そうなんしていた。

「美由紀さん」

「何でしょうか」

「高慢だと思われたなら、そう云ってくださって結構なのよ。わたくしは自分が鼻持ちならない高慢ちきな女だと自覚していますから。否定しようがないもの。直せないとも思うし」

「別にそうも思いませんけど」

「でも、今、貴女あなたに命令するようなことを云いましたでしょう。云ってから気付いて嫌になりましたの」

身分だの家柄だのは横に除けておくとしても、齡上としうえなのだし、それで普通な気もする。そう云うと、それは違いますわと美弥子は云った。

「齡上たかだかと云っても高高四五歳です。敬われる程の差はありませんわ。貴女だって保護せねばならぬ程、幼くはないでしょう」

まあ、中身は兎とも角かく、態なりは大きい。

「なら、対等であるべきです。わたくしは貴女に対してもきちんと敬意を払うべきでしょうし、貴女もわたくしの行いが宜しくないと感じたなら指摘し、時に糾弾すべきです。正せるならば正します。ただ」

高飛車なもの云いは直りませんと美弥子は云った。

「沁み付いてしまったようですわ。ご免なさいね」

「いや」

まるで気になっていないと答えた。

学友達の喋り方は、時に可愛らしいと思うこともあるのだが、聞いていて苛つくこともある。

堂に入っていない所為だろう。彼女達是一所懸命にお嬢様のお真似ごとをしているのである。そうでなければ成りかけなのだ。それでも一端の口は利く訳で、だから精一杯頑張っているなあとも思えれば可愛くも感じられるのだが、度を越せば何を生意気なと思ってしまうのだろう。

そう云うものなのだ。

だが美弥子の場合はそのようではない。気が強いのか捌けているのか、寧ろ清清しく感じる程である。この人はこう云う人なのだろうし、装いはどうであれ、芯にあるのは何かもつと豪快な姿なのだと言ふ気がするからだ。そうでなければ――。

このような状況になることはない。

やっぱり火なんか点きませんよと美由紀は云った。

「そう。こんなに燃すものがあると云うのに癩しかに障さりますわね。あ、貴女が悪いと云うことではないの。燐リン寸チくらい持つて来るべきだったと云う、これは自戒じけいです」

何だか知らないが、美由紀は乾燥した枯れ木同士の摩擦まに依よつて火を熾おこす試みとやらをさせられていたのだ。一筋の煙さえ出なかつた。

素人考くわえでしたわと美弥子は云つた。

「そんな簡単なものではないのね。実際わたくし、自らのもの知らず世間知らずを大いに恥じます。日後悔くわいしない生き方を心掛けていますのですけれど、でも改めるべきところは改め、恥じるべき行いは恥じるべきですわね」

「はあ」

山中で道に迷い壙あなに墮おちた上に足を挫くじき出られぬままに日暮れを迎えようとしている最中に述懐じゆくわいするようなことも思えないのだが、そこはまあいいようにも思う。

きやあきやあ泣いて叫なばれても困る。

その辺が学友達と違ちがうところなのだ。多分これが女学校の生徒達だったなら、助けて助けてと泣き喚わいていたことだろう。

ただ、現状に於おては二人で大声でも出していた方が救たすかる確率は上がるようにも思うが。美由紀もどうやら悲鳴を上げるのは不得意ふとくじなようである。

「秋口とは云え、陽が落ちれば気温は下るでしょうし——烽火のように煙を立ち昇らせれば良いかとも思っただけれど、浅智恵ね。夜になってしまえば煙は見えませんが、ここは窪んでゐるから、もしかしたら一酸化炭素中毒になってしまうかもしれないですわね」

「もの知らずとも世間知らずとも思えませんが」

美由紀がそう云うと美弥子はそれは貴女の心得違いですと返した。

「わたくしは先ず、山を嘗めておりました。登山家が入念な準備をしてから挑むような高峰と違って、都心からも程近く、ケーブルカーも引かれていて、毎年何万もの人が参拝のために登る山と云うことで、甘くみていたのです。山に謝らなくてはいけませんわね」

「山に——ですか」

高尾山である。

「ええ。日帰りも可能で登山者も多いと云うことから、ハイキングのような気軽さを持っていたの。多摩丘陵の延長程度の認識だったのでしよう。でも、この山は秩父山地に連なる歴とした山です。古くは修験者の修行の場でもあった訳ですから、険しくない筈もないのです。しかもこの森の深さと云ったら——」

美弥子は何故か笑顔になつて上方を仰ぎ見た。上にも天はない。鬱蒼とした樹樹の切れ間に、既に翳りつつある秋の寒空がちらちら覗くだけである。

「古くは北条氏照が伐採を禁じ、そして幕府直轄地として護られ、今も尚、行政に依つて保護されているこの森は素晴らしいものよ。わたくし、植物学者の牧野富太郎博士にお会いしたことがあるのだけれど、博士はお若い頃、この高尾山の森で様々な種の植物を発見されたのだと仰っていました。それだけこの森が外界から孤立していたと云うことです」

お身体を悪くされたと聞きましたけれど大丈夫かしらと美弥子は云つた。

「誰がですか？」

「牧野博士です。ご高齢なので心配」

いや———そうかもしれないけれど、他人の心配をしていられる状況じゃないとは強く思う。それに、どう聞いても美弥子は能くものを知っているし、世間も広い。

そう云つたのだが、一笑に付されてしまった。

「冗談じゃなくつてよ。ものを識っている人間がどうしてこんな目に遭いますか。しかも、貴女のような、関係のない前途ある女性を巻き込むなんて、言語道断だわ。配慮が足りないのです。そこは充分に自覚しています」

そもそも。

ことの発端は先週の日曜日さかのぼに遡る。

美由紀はその日、神田神保町かんだじんぼうちょうにある薔薇十字探偵社ばらじゅうじ たんでいしやを訪れた。調査の依頼ではなく、単に挨拶に行っただけである。

薔薇十字探偵社の探偵である榎木津礼二郎えのきづれいじ ろうとは、昨年えんの春に知り合っている。榎木津と、そしてその友人である中禅寺秋彦ちゅうぜんじ あきひこが、美由紀の通っていた学院を覆った霧を晴らしてくれたのだ。

今年の春、美由紀は世間を騒がせた昭和の辻斬り事件に関わってしまった。その際に、中禅寺の妹である雑誌記者の敦子あつこと知り合った。

敦子とはそれ以降親しくさせて貰っている。そうした経緯もあり、中禅寺の処には一度挨拶に行っている。

ただ、榎木津には会えていない。榎木津と云う人はかなり奇矯ききょうな人物で、もしかしたら美由紀のことなど覚えていない可能性もあるし——と、云うか八割方覚えていないだろうと云うのが榎木津を知る者達の見解なのだが——また美由紀の方にも別に会わねばならぬような義理も負い目もなかったのだが、取り敢えず礼ぐらいは云っておきたいと思っていたのだ。

美由紀は、夏休み中にも騒動に巻き込まれている。変死体の第一発見者になってしまったのである。その際も美由紀は中禅寺敦子に随分と世話になったのだが——その騒動の渦中、美由紀は榎木津の助手である益田龍一ますだ りゅういちと再会したのだった。その際にあれこれと聞いて、そのうちに挨拶に行きますと告げた。

そのうちなどと云う云い様は、まあ、かなりいい加減な云い様なのであって、日取りを決めた訳でもなく、約束と云う程のこともなかった訳だが、行きたくないと言う訳ではなかったから、都合がつけば顔を出そうと考えていたのだ。

十月十五日、美由紀は上野うえのに行った。

東京国立博物館のルーブル美術展を観に行ったのだ。

別に西洋美術に造詣そうけいが深いなんてことはない。好きな訳でもなかった。それ以前に絵画自体を目にすることがない。前の学校に何とか云う立派な画家の模写だかが飾ってあったのだが、ご多分に漏れずそれは怪談めいた噂話を纏ったものであり、だからそう云う色眼鏡で観ていただけなのであって、純粋に芸術作品として眺めたことなどただの一度もなかった。

でも、まあ観たい気がしたのだ。

芸術を鑑賞することで何か新しい世界ひらが啓けるだろうなどと考えた訳ではない。

興味半分、あとは話の種になるだろうと云う打算だったように思う。

美由紀は、美由紀の周りを固めているお嬢様擬もどきの級友達に対して提供出来るような話題を一つも持っていない。と、云うよりも彼女達が何を喜ぶのか考えるのが面倒臭いのだ。だから概ね、ハイハイと話を聞き、咬めるところで咬むだけだ。

でもまあ、ルーブルなら自発的に語ってもいいような気がしたのであった。

何の興味も示されない可能性もあるけれど、顔を響しかめられることも哀れみを受けることもないだろう。何しろ、天下のルーブル美術館である。仏蘭西フランスの芸術だ。保険金だけで一千万円だとか云う話を聞いた。

だが。

美由紀は観るのを止めた。

見たこともないような——人出だつたからである。

一体何処にこれ程の人間が潜ひそんでいたものか。別に潜ひそんでいた訳ではないのだろうが、まあ湧いて出たことは間違いない。それこそ黒山ひとだかの人集りと云うか門前いぢ市を成すと云うか、あれ程大勢の人間と云うのを美由紀は見たことがなかった。

しかもぎゅうぎゅう詰めに並んでいる。

呆れた。

千葉の片田舎から東京に出て来て一年以上になるけれど、美由紀は東京と云う処を殆ど知らない。

全寮制の女学校で暮らしている以上、学校の外がどうなっているかと関係のないことである。阿弗利加^{アフリカ}にあらうと西伯利亚^{シベリヤ}にあらうと、敷地の外に出さえしなければ大差はないのである。

顔を合わせる顔触れも人数も決まっている。

こんなにも多くの人類が湧いて出て来られると云うことは、もっと大勢の人類がそこに潜んでいると云うことなのだろう。

そんな有り様は想像することも出来ない。

この——一人一人に人生があるのだ。悩みやら喜びやら悲しみやら楽しみが、人数だけじゃうじゃあるのだ。その想像は、もう美由紀の許容出来る範囲を遥かに超えたものだった。そしてその中の一人に混じってしまったら、もう美由紀なんかはいないに等しいではないか。

物怖じするとは正にこのことである。

美由紀は早急に上野を後にした。
で。

博物館に背を向けた途端、美由紀は何だか癩しかくに障さむって、帰るのが嫌になった。

無駄だと思つた訳ではない。人生に無駄なんか無い。どんな経験でも何かの糧かてにはなる訳で、楽しかろうが腹立たしかろうが徒勞と云うのはないのだと美由紀は思つてゐる。

癩に障つたのは、単に物量に圧倒されてすごすご背を向けた、己の覚悟のなさに対してである。

こんなに混んでゐるのは嫌だと思つたから止めた——と云うのなら、それは己の考やえに沿つた判断であり行動、と云うことになる。しかし美由紀は嫌だと思つたのではなく、嫌になる前に挫くじけただけなのだ。

人混みに果敢に分け入つて行くだけの度量も、順番が来るまで凝じ乎っと待ち続ける忍耐力も、それらを担保するだろう強く高い目的意識も、揃そろって欠如してゐる。

こうしたことは勝ち負けではないのだから、負けて悔しいなどとは思わないけれど、それでいて敗北感に似たものだけは感じてしまう。そのところが釈然としなかつた訳である。

と——云う訳で、美由紀は熟慮の末に神保町に向つたのだ。序ついでですらない。ロクな理由ではなかつたと思う。

神保町は学生の街で、且つ古書の街だと聞いていた。

慥かに角帽を被った大学生らしい姿の人が目立つ。本屋も多い。町全体に、インクや紙の匂いが沁み付いているような感じもしないではない。

暫くすずらん通りを彷徨して——要は道が能く判らなくて迷っていたようなものなのだが——雰囲気だけでも独り立ちしたような気分になった頃、新しいんだか古めかしいんだか判らない建物が目に留まった。

それが榎木津ビルディングだった。

テラーの脇の入り口から裡に入ると薄暗いロビーのような空間で、正面に石造りの階段があった。

ひんやりしていた。残暑も一段落して過ごし易い季節になったものだと思っていたのだが、外気はそれなりに暖かかったのだと知った。

己が石の段を踏むその音を聞いて、美由紀は去年の春まで通っていた学院のことを思い出した。学校は石で出来ていて、逆も冷たかった。そして石の床や壁や天井は凡てを撥ね返した。でも、ここは。

——ここはどうだろう。

いや、ここは違々と美由紀は思った。素材は同じだがこのビルは学校とは違う。

理由は——明白だった。微妙に煩瑣^{うるさ}い。落ち着かない。階上から何やら声が漏れ聞こえている。前にいた学院は、笑うことも鼻歌を唄うことすらも禁じられていた。無音だったから自分が発する音が自分に撥ね返って来ていたのだ。

——何だろうこの喧騒は。

探偵事務所は三階だと聞いていた。二階を超すと声は益々瞭然^{はつきり}聞こえるようになった。女声である。間にもごもごと聞き取り難い^{にく}声が雑^まじるのだが、こちらは男声のようだった。

薔薇十字探偵社と記された扉があった。

どう云うことですかと云う女の声が扉の中から聞こえて来る。怒鳴っているのではないのだが、口跡が良く聞き取り易い。その上に能く響く声音なのである。

暫^{しば}し戸惑ったが、ここで引き返したのでは上野に続く二連敗である。いや、繰り返すけれど勝ち負けではない。自分に負けたなどと云うくだらない修辞^{レットリック}は大嫌いだ。独り相撲に勝ち負けはない。それは最初から無為だと云う比喩^{ひゆ}だろう。

ただ、美由紀は勝負してもいないのに負けたような気になる自分が残念に思えるだけである。その残念をこんな短い間に二度も繰り返すのは如何^{いか}なものか。

美由紀は扉を開けた。